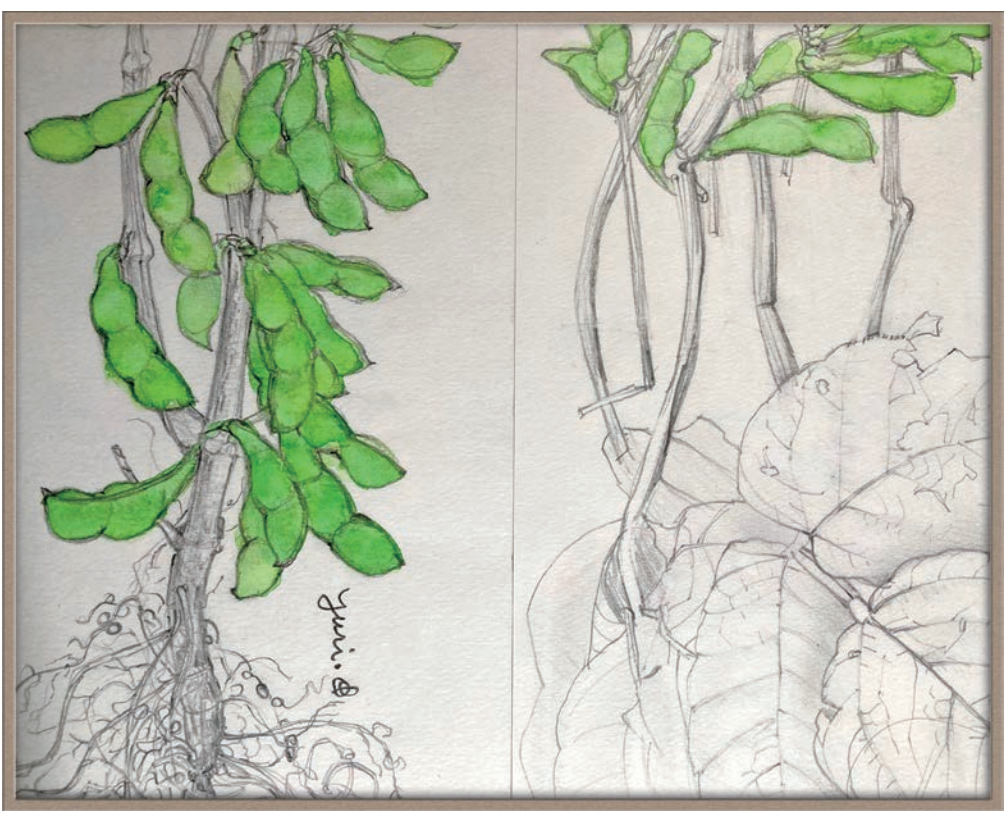
三河アララギ

２０２３年 令和５年８月 葉月（はづき）

八　月　号

第 七十 巻　　第 八 号



ニューヨーク日記（202）

http://blueshoe.copetin.com/

BlueCat, Shoe Lady

CAT DOCTOR

Blue Shoe Diaries

州を超えて引っ越すと色々な手続きが有るものですね。健康保険を変えたり、免許や身分証明書を変えたりとか。割とめんどくさい中猫のお医者さんも見つけるものです。今回は登録と健康診断や予防注射のアップデートをしました。もちろん家のシャーロック君は病院嫌いであたりまえだけど少し不機嫌。そんな中で隣の診察室の窓から視線感じると思ったらとてっも心配そうにビビってるにゃんこさんと目が合ってしまった！まるで助けを求めているかのように。結局会えなかったけどシャーロックの健康診断は無事済んで健康な猫さんです！ あと1年は来なくて大丈夫よ～

When you move to a different state, you must do a lot of paperwork, like applying for health insurance and getting your state driver's license or ID. Somewhere along those lines, there's also finding a new vet for your cat. Here's Sherlock at the vet, getting a checkup. Definitely not happy, but across the hall in the other examination room, I saw another scaredy cat as if she was asking for help too. We didn't get to meet her, but Sherlock got to leave with a clean bill of health! As for the bill, despite having pet insurance, that was not cheap!

目次

第七十巻第八号（通巻八三六号）

表紙・えだまめ　今泉　由利（1）
ニューヨーク日記（202）　Blue Shoe（2）
歌集　わが冬葵　御津　磯夫（4）
歌集「草々後集」　今泉　米子（5）
昭和61年九月号作品　大須賀寿恵（6）
昭和61年九月号作品　夏目　勝弘（7）
歌集　八千代　岡本八千代（8）
記録的　弓谷　久子（10）
安心　今泉　由利（12）
良き家族　安藤　和代（14）
笑顔に替えて　清澤　範子（16）
麦秋の道　山口千惠子（18）
梅雨末期　杉浦恵美子（20）
気がかり　伊藤　忠男（22）
庭中改修【そのⅡ】　白井　信昭（24）
福祉の原理　矢崎　直人（26）
『ことよせ』　いーはとぶ
鈴木美耶子（28）
吉見　幸子（28）
牧原　正枝（29）
森　厚子（29）
水野　絹子（29）
牧原　規惠（30）
稲吉　友江（30）
伊藤　晴江（31）
大武　智子（31）
現代学生百人一首　東洋大学
鎌田　桃佳（32）
荒木　美（32）
矢作　桃花（32）
後藤　早紀（32）
根本姫花利（33）
石塚　愛優（33）
堀田　雅織（33）
松本　茜音（33）
『俳句』
植村　公女（34）
木村　歩歩（34）
今泉　如雲（35）
矢崎　直人（35）
今泉　由利（35）
川口カルチャー受講者自作自詠俳句集（36）
五感を澄ませば（14）　杉浦恵美子（38）
附録（十四）　矢崎　直人（40）
『優先席は必要か』　中屋　保之（42）
楽しい時間（129）　山本紀久雄（44）
『酔いの徒然』（136）　丸山酔宵子（46）
「樹木礼賛」　高橋　育郎（48）
絹の話（153）　今泉　雅勝（50）
「江上浩二の独り言」　江上　浩二（52）
初狩便り21　花野みぶり（54）
本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬
本田　勇気（56）
康鍼治療院　玄　翁（58）
『畦上蛙鳴』　殿山　木風（60）
編集室だより　今泉　由利（62）
「三河アララギ」について（64）

歌集　わが冬葵

御津磯夫

ひらきゆく白木蓮の競ふ枝まひるの風にをどるをどる

新らしき代の醫博士は否むとも熱き白粥に梅干はうまい

引馬野碑の茂吉の文字を指(ゆび)したまふ伊豫宇摩の郡(こほり)よりひとは來たりて

十五階のひとるの窓の灯れるを夜更けてさへもまた見しむるか

春いまだととのはざれば朽葉色の斑(ふ)の雨蛙小さし幼し

殘り花枝放れゆく折々に音なきさまもいさぎよしとする

秀(ほ)つ枝には花すでになし眼を伏せよ踏む下地(したつち)の苔の花むしろ

御陣屋(ごぢんや)の旌旗(せいき)の竿の蝕(むしくひ)ひて垂れさがりたるわが部屋の壁

錦木の親木のありて実生あり芽の遲速(おそはや)の二木並べる

一抱へ牡丹の花を剪りてゆくちちははの墓そのめぐりの墓

歌集「草々後集」

今泉米子

颱風のざわめきつづき實生より培ひし濱木綿の花終りたり

木芙蓉のたわみてなびくこの朝を休み終ると吾が子歸りゆく

しまひ風呂洗ひてをれば聲變りはじまりし吾が子の英語よむこゑ

曲り角よりクローバー生ふる路となり君のみ寺の山羊あそびをり

午後の三時に白粉の花咲き出づるを母はのらしき病み呆けながら

手術後の保養に來れる吾が娘吾が化粧室を掃除してをり

穂芒の亂れし庭に先生のつね使ひ給ふ大小の如露

窓あけて敎へたまへる青山の裏の近道をわれかへりゆく

雪柳の實生のもみぢ散りのこる所長官舍にいざなはれたり

五萬分の一秒の空電圖示し給ふ芝枯れし壕舍の研究室に

昭和61年9月号作品

大須賀寿恵

生五味を埋めに出で来てふり仰ぐ久々の晴れのはるけき空を

水底の見えはじめたる門の川泥をひきつつ泥鰌のはしる

梅雨の日の今朝はれあがり御堂山の頂きの松の枝までも見ゆ

剱橋より川口に沿ひ下る千三百歩行在所跡の石垣崩れむとする

引潮に川底浅き音羽川水泡片寄りつつ流れゆく

御所橋より行在所跡の小松見えてめぐりとぶ白きは都鳥なり

石垣の上をたどりてゆく吾に逃げ転げ落つるはさみ朱き蟹

川葦の緑にこもり川蟹の泡吹く音の聞こゆるごとし

御所橋の巨松枯れぬ残りゐる切株覆ひてそよぐつる草

小波を立てつつ音羽の川は流れ折々鮠の光りそよげる

昭和61年9月号作品

夏目勝弘

血止め薬塗つておきました我が頬を切りたる若き理容師はいふ
うら若き女の力と思へぬほどに我が肩ほぐす散髪ののち
三ケ月に一度散髪すればよい我が髪の毛の細くなりたり
日本刀もて額を斬られしは四十年前髪上がりてあらはとなりぬ
額に頸に手に足に股にもある切り傷にはそれぞれの思ひのあり
学生等の多くなりたる街を過ぎて老い一人居る長養院の墓地
掌に入る程の赤鉛筆もて編集せし姿折々思ふ夏の日となれば
佐藤家の墓見つからず姿やさしき歌碑に対ひてわれ帰りきぬ
絵に歌に只管生きて逝きましし翁を思ふは夏暑き日なり
碑もいずれは土になる日あらむ我には消えざる一つの思ひ

歌集　八千代

蒲郡　岡本八千代

今夜より独りで寝るといふ吾子の小さき蚊帳の穴を繕ふ

夏休み第一日の吾子の部屋のドアに貼りあり「只今勉強中」

納めると言ふも捨つると同じなり年古りし位牌持ち帰り来ぬ

二百年前に嫁に来し人の墓小さき二つにも鶏頭を供ふ

幾ばくもわが使はざりしパフ二つ黒皮症癒えず捨ててしまひぬ

商人の置きて行きたる最中一箱教師われらの寄りて分け合ふ

鴨下の出しし読書論は短くて「本読めば眼が悪くなる」

一粒の酔ひ止めを洋子に飲ませおく風入る窓を背にかばひつつ

水道の初めて引けたる此の夕べカルキの匂ふ風呂を焚きをり

柿の季すぎて柿欲しと一日中言ひゐし吾子ら今は寝ねたり

仏桑花もポインセチアもみな赤し持ち来て今日の日直を終ふ

三階の教室に朝の陽はさして生徒らとレリーフの少女像つくる

給食のミルク飲ませたくなき担任と飲まさねばならぬ意味を争ふ

松風の音高き日の日直に宿直蒲団のシーツ更へをり

「ジャンクリストフ」読ませてゆけば接吻に中学二年生雄とまどふ

記録的

豊川　弓谷久子

台風の二号が発生南の海をゆっくり東に進みいるらし

記録的豪雨降りをりすさまじき雨音視界もかすみてをりぬ

雨音に眠れぬ夜も明けゆきぬ被害無きかと先づたしかめる

倒木につぶされし家浸水家屋ニュースにうつるこれも我が町

水に浸りし自動車の屋根馴染みある青山病院のあの駐車場

我の永き記憶には無し次々と伝はりて来る被害情報

縁先に並べ置きたり十鉢のすかし百合の花咲き初めにけり

子が丹精のすかし百合の花いっせいに咲き揃いたりこの豪華さよ

すかし百合の紅の花終日を眺めて暮す満ち足りて暮す

隣家より貰いて三年さきがけて咲きし柏葉紫陽花終る

田植え間近の田園風景車窓より今年も眺むる今日検診日

田原への旅の思い出語り合ふ子の買いて来しメロン食べつつ

夏物のブラウス着たり梅雨空も今日中休みか真夏日となる

和服解きカーテン縫いたり八畳の部屋の古さとよく似合ふ

差し上げる人も無けれどエコバック今日も縫いをり水無月も逝く

安心

東京　今泉由利

南半球にてボーッと大きく見えしものアンドロメダ銀河を見たかと思う

ひとすじの光とどきぬ夜は朝に春は夏へと初夏の日

飛行機の窓一万メートル上空にて地球の丸み見下ろしていた

地球なるやさしき丸み心して地球を歩く地球に眠る

宇宙なる一(ひと)つ地球の内にしてまだ見ぬものよまだ気付かぬものよ

五七調に念仏を説かれしと親鸞聖人私に仕舞う

自らの思いを信じ自らの描く線をもしっかり信ず

五七調和歌に親しむ一世にて五七のリズムに穏やかにいる

クロッキーブックもてクロッキー肌理（きめ）細やかな真実を描き

朝顔の花咲く鉢をたずさへて江戸よりつづく朝顔市を

父母の庭内ひとところ年々にして山百合の花

花軸を一つ立てをり一つ咲く一人静と静かにをりぬ

何かしら幸せなことあるらしい今日のモデルの輝やき美し

行きゆきて地球上の遠い国同じ心の人と出逢へり

何もかも共通点のなきままにセリーナさんと安心ありき

良き家族

豊川　安藤和代

朝未き木立に啼くは山鳩のくぐもる声よ梅雨入りを聞く

「週末は又雨か」と呟いて出勤す孫のひびく靴音

雨模様紫陽花は葉にかたつむり蛙遊ばせ水無月の庭

いつしかに暮しにも馴れ孫娘京都訛で挨拶を言う

斑なるそれも美し花菖蒲そぼ降る雨にぬれて色増す

昨日抜きし十薬の香は家事をする行く先指先まつわりてくる

男女平等子連れ出勤と今の世を吾が胸中は穏やかならず

「生きる」とは誰も真剣蜚蠊も殺虫剤から逃げるその足

問題の山積みさるる今の世も熟れて杏子は甘き香放つ

楽しみは自ら見つけなきゃだめと絵手紙書かん無花果ふたつ

水茎のあと美しき友からの絵手紙赤きアマリリス咲く

肥えづきし青田すれすれ飛ぶつばめ内緒話か頬あかくして

ニミリ程松葉ボタンの発芽なり今宵の雨よ柔らかに降れ

「昭和歌謡」聞きつつ眠る雨の夜の「佐渡情話」にぞ貰い泣きする

良き家族良き隣人に恵まれて吾が人生の花は大輪

笑顔に替えて

春日井　清　澤　範　子

今日で六ヶ月になる抗ガンカペシタビンをのみ娘と二人で頑張り生きる

今朝は抗ガン剤カペシタビンをのみ身長体重など計る

娘に心配ばかりかけるので歯科の診療をためらいをりぬ

今朝もカペシタビンをのみもう歩けないのか左足をかばい応接室に

消化器内科の薬は二週のんで一週休み今週は休みの週なり娘と二人でさだめと二人

吾の飲む抗ガン剤青色にてジェネリック左足をかばい右足をふんばりもう歩けないのか右足で左足をふんばる

徳洲会病院にて始めたリハビリ足の前後の運動をイチニイチニとかかとを動かす

S状結腸ガンに吾は六ヶ月にもなる家族は娘と二人で夕食も半分担

余命一年診断されるも半年に夫の居し想い出

娘と二人家族になり気ますくなりしも笑顔に替えて

休薬の日なり娘と二人共に腰痛を持ち娘は笑顔で家事を頑張る

次々に吾の体は弱まりて病院のリハビリ行くかどうする

亡夫は家族に見とられることなくて吾ら二人を残して行ってしまいぬ

洗濯をして廊下に並べば一晩でもう乾ききりたり大切なもの

足の具合が悪く娘とそぐわぬ日もあり悲しくなるでも頑張る

麦秋の道

豊川　山口千恵子

高々と泰山木の白き花無人の家の庭に一花

歩みゆく道に熟れたる梅の実の数多ころがれり踏まずに行けり

一面の色付く麦の穂揺るる道雨もよひなる野の道静か

風吹けばさらさらすれ合ふ音のして歩きゆく道麦秋の道

堀り立ての馬鈴薯貰ふ散歩道心楽しくささげ持ちつつ

人住まぬ家の梅の実稔りゐる住みゐし人も杳かになりぬ

忽ちに休耕田の麦刈られ梅雨の田の原広々とす

庭になる梅の実とらむと庭に出ず午後より雨の天気予報

家々の庭に咲きゐる紫陽花の色夫々をみて通り過ぐ

農休み知らせる回覧回りくる田植ゑ終へしをやすらぎしも杳か

吹き渡る梅雨の晴れ間の若葉風植田の稚苗さざ波の中

大食ひを競へるテレビ番組のスイッチ切りぬ食欲無きわれ

スーパに買ひ来し刺身の盛り合はせ夫と二人の父の日の夕餉

アガパンサス淡紫の花の咲く続きし雨の上がりたる道

刈りとりの済みたる麦畑静かなり鴉群れつつ諍いゐし一組

梅雨末期

蒲郡　杉浦恵美子

小垣江に帰るのならば名鉄よううん刈谷に自転車置いた

母親へ贈物をと大須の街初めて歩いたフィリピン娘

我が彼氏ラーメン店にて働くと問はず語りのフィリピン娘

この娘日本の生活希望満ち何をするのも楽しいらしい

束の間の会話なれども丁寧な挨拶をして娘は去りぬ

今どきの日本に少ない真っ直ぐなフィリピン娘よどうかこのまま

裏薮に鶯盛んに鳴く夕べ流し磨き居り今年の夏至は

アサリなどをらぬと分かって受付がにっこり言ひぬたんと獲りんよ

いやいやいやわたしはアサリは狙はないマテガイ獲りにやってきたのよ

蒲郡アサリの名所と知られどもめっきり獲れぬ海澄むゆゑに

お父さんあの人塩を持ってるよそうそうわたしはマテガイ狙い

それらしき穴に塩撒き暫し待つするとにょっきりマテガイ顔出す

飛び出したマテガイ捕まえ根競べ焦れば半分千切れてしまふ

マテガイはたった四個しか獲れねどもハマグリバカガイ名も知らぬ貝

知らぬ間に海の様子も変はりたりアサリの代はりに名も知らぬ貝

気がかり

大阪　伊藤忠男

見聞きしたことは何でも書き留めるスマホは我の日記帳なり

朝早く並んで予約待つ間とて貴重なるかな我が時間なり

行く道の足取り重き曇り空帰りの空は茜色なり

検査終え大丈夫とは思へども診察までは気がかりなもの

いつの間に意識遠のき目覚めたら窓から見える夕焼けの空

内視鏡検査始まる前曇り今は青空眩しかりけり

今少し今少しなり今の今待つは長きもほんのひと時

人生に不安と焦り無駄なると教えし医師の穏やかな顔

検査まだ世俗離れて時を待つこれも修行と腹くくるなり

看護師の笑顔の問いに救われるいつもと違う緊張の時

まだまだと焦る気持ちも心なし霞みかかりて時が過ぎ行く

下剤飲むたびに気になる腹の虫鳴く声聞きて立ち上がるなり

車窓から見えるいつものこの景色今は明るく鮮やかなりや

大腸に胃カメラ検査あと5年要らぬと言われ顔綻ばす

その昔自考自成と教えられ我が行く道我が思うまま

庭中改修【その Ⅱ】

豊川　白井信昭

み社の狛犬近くいつしかにかの牡丹桜伐られてありぬ

軒先のプランター二つ鉄砲百合まず白きが開花

日向にて四株のびたち咲き始む芳しき匂い漂よう軒先

一株の笹百合の如隣りあう蕾膨らみ来て六輪咲きたり

ヤブカンゾウ花壇に植えて幾年か林立の茎増えてしまへり

ヤブカンゾウ花壇二か所今日よりは一つ残らず根絶やしにする

東の花壇解体の穴埋めに掘り下げし土台車に運ぶ

この月も生垣改修支柱ごと豆板沿いに石を詰めゆく

頂の歌碑へゆかむと峠道ヒメハルロード通行止

バイパスの山すそ通る御堂山麓より頂通行止

御堂山朝焼けコース頂の丹野城山の歌碑ついに行けず

生垣に花壇の囲い豆板の長さ一・一〇M（メートル）二枚生かせり

東の花壇の豆板生かさむと残る二枚を我うちはがす

生垣の囲い豆板重ねゆく豆板四枚五メートルほど

生垣の見なりに蛍石しきつめて庭石八つようやく据えぬ

福祉の原理

埼玉　矢崎　直人

強さでも弱さであつても受け入れて自分で自分をまず受け止める
今はまだ出来ないと思ふことあるもやろうといふ気を持ちて向き合ふ
時間かけ共に過ごせる時やつてもらへることがあること
日によつて向き合う気持ちを改める新たな気づき出会へるように
習慣の中にも変化気づけるか気をよみ感じ確かめてみる
反応に戸惑うこともあるけれどまずはまずはと受けとめてみる
持つている力をみんなに発揮してもらえるように福祉の原理

これまでの支援の経過報告会聴いて向き合う姿勢が見えくる

妹の夫婦と両親一台の車で掛川温泉旅行

東北道圏央道に東名道高速道路を静岡県まで

足柄の鮎沢川にて宙を舞ふラジコン自由に自在に宙を

ハシビロコウ動きまばたきだけ見れた梅雨の掛川花鳥園

掛川城守れる堀の百合の花城主を何度変えて咲きつぐ

浜焼に刺身新鮮沼津漁港土産に市場の干物を買へり

東名を西に東に曇り空皐月の富士にまみゆるをえず

『ことよせ』

西浦公民館　いーはとぶ

大島も小島も見えぬ今朝は雨茫々の窓見つめゐるだけ
瑠璃色の空のひとつ星ベランダのフェンスに肘つきひとり私は
半世紀過ぎてもなほも兜飾りそして今日またしまひおくなり

鈴木美耶子

五十鈴川のせせらぎの音聞こえくる大き敷石踏み進みゆく
人々の賑はひ戻るおかげ横丁赤福本店土間を歩めり
伊勢路へとバスにゆられて献華祭へ奉納の舞神楽殿に見ゆ

吉見幸子

この家は女ひとりと嗅ぎ分けてかカラスにタヌキにまた音がする　牧原正枝

ゴトゴトと天井裏か屋根なのか裏に表に家中点検
捕獲檻かしてはくれぬ市の説明「指定害獣」「動物保護法」

そろひてゐるみなの太極眺めつつ松の樹の下涼風通る　森厚子

久々の「ひまわりの湯」はつるつるりひとあしひとあし踏みしめ露天へ
平日の「ひまわりの湯」の閑けしくたゞたゞ浸かるゆうるりゆるり

「母の日」の子らの手作り手巻き寿司口福至福かみしめる今　水野絹子

いつまでもあなたの娘でいたいのにまた母は呼ぶ伯母の名前で
仏壇も墓さへ要らぬと叔母逝きぬその生き様のああ潔し

三河湾を島に向かひて船は進む二つの半島島々の見ゆ
自然売る島に降り立つ美しき緑の中に廃屋のあり
わが畑の万年育たぬブルーベリー小さきながらも実の五つ六つ

牧原規惠

母の介護助けてくれる夫の居て窓から通る六月の風
あと十分目覚し止めて微睡まむ至福の時をしばし味はふ
孫子たち母の見舞に帰り来る母は涙して頷くばかり

稲吉友江

金沢の武家屋敷跡の白き土塀学生の時に見しと変はらず
兼六園徽軫(ことじ)灯籠見入る母「次へ」と言ひしを今も悔やむ我
母の日のカーネーションの二か月経て今また咲かせる真赭(まそほ)の花を

伊藤晴江

嬰児はわれの腕に全身を委ねて眠る泣き疲れしのち
四十年の記憶微かに蘇る一瞬恨めしそうな表情をする
亡くなりしは八十三歳ちちのみの父の孤独を老いづきて知る

大武智子

現代学生百人一首

東洋大学

甲子園熱き戦い終えた君髪形一つで別人みたい

秋田県立秋田北高等学校三年　鎌田　桃佳

問題と見つめあって十五分二次関数にフラれた私

山形県立山辺高等学校一年　荒木　美咲

先生のかわいい眉が気になって目が離せないミーティング中

山形県立山辺高等学校一年　矢作　桃花

「うるさいな」言ってしまった一言を細い身体の祖父見て悔やむ

山形県立山辺高等学校二年　後藤　早紀

手元から離れずババがステイホームコロナの威力トランプにまで

いわき秀英高等学校一年（福島県）　**根本　姫花利**

「本当はね」初めて知った新事実父の手一つでずっとありがとう

天栄村立天栄中学校二年（福島県）　**石塚　愛優**

風を切り仲間目指してひた走る溢れる思いたすきに込めて

福島県立安積黎明高等学校一年　**堀田　雅織**

ペダルこぎ左右に揺れた背の荷物箱にぶつかるトマトの悲鳴

福島県立安積黎明高等学校一年　**松本　茜音**

『俳句』

水打って宇宙空間滴らす　植村公女

パティシュエのひっつめ髪や夏きざす

言ひ訳のひと言多し夕端居

燕来てサイドボードに合唱団　木村歩歩

不忍の池に蓮打つ五月雨

紫陽花や家族旅行の備忘録

また来るや宿に咲きたる山法師

雉鳴いて仙石湿原三年年

五月雨や菊桐紋の釘隠　今泉如雲

青嵐や鉄幹晶子住みしとて

梅雨川や漢詞書かれし大擬宝珠
今日生きて卓上に一輪のばら

カミソリを忘るひさかた夏の旅
竹の秋ハシビロコウに会ひに行く
花鳥園絵になるエミューの西日かな
掛川の城を守れる百合の花
皐月富士見えなき富士を愛づばせを

矢崎直人

青梅は酒となりゆく粛々と
秋場所の取組表をエアメール
炎天下ちんぐるまの小さき影
砂糖棗の繊維のノートコスタリカ
心臓の薬となりぬジキタリス

今泉由利

川口カルチャー受講者自作自詠俳句集

散歩道訛り飛びかふ梅雨の空
滝刺のグランド狭し若葉風
フルートを奏でる生徒夏木立
新緑の香を吾子へ肩車
風薫る両手で支え孫歩く
木道を踏む音重し梅雨の入り

秋山

多摩は青もみじ咲く奥座敷
球根は寒さに耐えて花が咲く
手動ドア無人駅多し八高線

雅山

かさかさと落葉踏み行き野の小路
朝日さす山のかなたに富士の峰
吐く息の白くたなびく冬の朝

吾山

春来たる新(あら)たな友の和を広げ　幸泉

笑い声小路にひびく秋の山　貴山

片蔭を頼り行き行くポストまで
炎天下ちんぐるまの小さき影
マスクして日傘を差して今日を生く
野生ラン敦盛草の紫花　由利

洗面の真水親しむ薄暑かな
五月雨やふらるままに散歩道
六月や雲の隙間に月の陰
瞳もえ黒髪なびく薫風に
子規啼いて雨濛濛と煙るかな
鳶舞う湘南の浜薄暑かな　木風

五感を澄ませば（14）

杉浦恵美子

擬人化

最近「保護犬・猫動画」にハマっています。

各種のシリーズをスマホで見続けていると、中毒性があるのか、あっという間に時間は経つわ、肩は凝るわ。

でも止められません。

中でも元飼い猫が捨てられて野良になり、心ある人に救われて病院で検査をすると、複数の病気に侵されており、予断を許さない状況。そんなの気になって仕方ありません。

またある野良猫は、保護されたとき手遅れの癌で余命僅か。それでも少しでも苦しくないように酸素室を用意し、ふかふか寝床で手厚く看護。

まさに人間並みの介護。

ボランティアの方々のお世話ぶりには頭が下がります。

でもふと思いました。

これって随分擬人化してやしないかと。

もちろん捨て猫、多頭飼育崩壊等は絶対にあってはならないこと。しかし野良猫の運命を人間に比して慮るというのも一寸疑問が残ります。

そういえば、私の大好きな犬猫動画は擬人化に溢れています。

犬猫なのに、ひとり、ふたり、男の子、女の子、お兄ちゃん、友達、ご飯、おやつをあげる…。

また犬猫動画に人間の言葉のアテレコ等々。

思いなしか最近は犬猫たちまで人間っぽいしぐさをしているように感じられます。

尤も多分に私たちの方が彼らを人間に引きつけたがっているのでしょうが。

さて、「ごんぎつね」という誰でもよく知っている童話があります。これも擬人化しているからこそ余韻のあるお話なのではないでしょうか。

半田市の「新美南吉記念館」でストップモーションアニメーション「ごん」（八代健志監督）が上映されていると知り、行ってみました。ここでは人間の側からは普通の子狐、ごんの気持ちを表現するシーンは狐の着ぐるみを着た可愛らしい木彫りの男の子の顔、と使い分けられていて、最初は違和感があったのに、物語に没入するうちにごんがなんともいじらしくていじらしくて。

一回では飽き足らず、何ケ月後にもう一度見に行ってしまいました。

28分と短編ですが、きめ細やかに作られていて、原作のごんの擬人化をさらに深めているばかりかあまりの可愛らしさにごんのイメージを定着させかねない（笑）作品です。来年三月まで30分毎に上映されており入館すれば見られますのでご興味のある方はぜひ。

擬人化について「動物や非生物の安易な擬人化は、対象を人間に引き寄せて理解することでもあるため、かえって実像の理解を妨げる可能性もある」とか、「日本人は身の回りのありとあらゆるものを擬人化したがる傾向があるがそれは『鳥獣戯画』に遡る」など、その話題は多岐にわたっていて収拾がつかないほど。

ではさて和歌短歌の擬人化はどうなっているだろうか。あります。それも沢山。

例えば百人一首から

小倉山峰のもみぢ葉心あらば今ひとたびのみゆき待たなむ　　貞信公

久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ　　紀友則

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月宿るらむ　　清原深養父

きりがないので近代短歌から

やはらかに柳あをめる北上の岸辺目に見ゆ泣けとごとくに　　石川啄木

深々と人間笑ふ声すなり谷一面の白百合の花　　北原白秋

修辞技法の一つとしても擬人化は日本人の心象に豊かに息づいている気がします。これも日本特有の文化なのかもしれません。

ごんお前だったのかてふ兵十の言葉小さく呟いてみる

附　録（十四）

矢　崎　直　人

【静岡旅行】

東北道圏央道に東名道高速道路を静岡県まで

妹夫婦と両親と私の五人、車で静岡県の掛川に一泊旅行に行きました。東北自動車道の岩槻インターから高速道路にのって、圏央道（首都圏中央連絡自動車道）を通り東名高速道路を走りました。

足柄サービスパーキングエリアで休憩中に、鮎沢川でラジコン飛行機を飛ばしているのを見ました。急上昇と急降下に宙返りを繰り返す自由自在な動きが面白かったです。

足柄の鮎沢川にて宙を舞ふラジコン自由に自在に宙を

竹の秋ハシビロコウに会ひに行く

東名高速道路の掛川インターを下りてすぐに掛川花鳥園がありました。大きくなった竹薮の笹が風に揺れていました。花鳥園では、世界中の様々な鳥と植物が見られました。バードショーでは鳥の芸が見られ、インコにエサやり体験をしたり、スイレンプールでは熱帯魚が泳ぎとスイレンが咲いていました。最奥部のアフリカ由来のペリカンに似たハシビロコウという鳥が人気で、普段はじっとしていてエサである魚を獲る狩りの時だけ俊敏に動くとの

ことでしたが、まばたきをする所しか動いているのは見られませんでした。

ハシビロコウ動きまばたきだけ見れた梅雨の掛川花鳥園

掛川の城を守れる百合の花

掛川城の堀に、百合の花が群生し様々な色の花が咲いていて驚きました。お城まで行くと復元された天守への坂はかなり急で登るのをどうしようかとためらうほどでした。上まで登って行くと敵を防ぐための様々な仕掛けや甲冑が展示され掛川市内を一望出来ました。掛川城御殿には、掛川城の歴史が説明された展示があって、何度も城主が変った戦国時代から江戸時代の変遷の様子、安政地震の被害の大きさ、掛川市民の再建への熱意が伝わってきました。

掛川城守れる堀の百合の花城主を何度変えて咲きける

行きは焼津のさかなセンターで刺身に生しらすの焼津どん、帰りは沼津港で牡蛎、帆立、蛤の浜焼きを昼食に食べて海鮮料理を堪能し、市場で干物を買いました。

浜焼に刺身新鮮沼津漁港土産に市場の干物を買へり

『優先席は必要か?!』

中屋保之

最近のことである。朝の混雑時にバスに乗った。ほぼ満員状態の中、少しずつ詰めてもらえれば後に続く乗客も助かるのにと思いつつ歩を進めた先に若い女性がいた。バスの振動で、その女性とほんの少し接触したとたんに鋭い眼で睨まれた。多くの男性（女性でも！）は一度ならず体験しているのではないか。私の利用しているバスではかなり前から、乗客が席に座るか手すりに掴まるかしてから発車してくれるが、かつてのような混雑時での〝お繰り合わせ願います〟のアナウンスをついぞ聞いた事がない。また時折りではあるが、空いている「優先席」の前に立ったままの乗客を見かける。〝座ってくれるか、私を座らせてくれれば狭い通路が楽になるのに…〟と思うが、携帯に夢中で気づかない。以前はよく見かけた「目配り、気配り」の文化が失なわれてしまったように思える。代わりに「忖度」ばかりが幅を利かせている。世知辛い世の中になったものである。親が、靴を脱がせることもせず外の景色を眺めさせていたり、混んでいる車中でも子供のために平気で席を占拠している光景を見かける。

ジョージアの駐日大使の優先席ツイートが話題になっている。利用を必要とする人がいないにも拘わらず「優先席」を空けておくことが是か非か、という事の様である。ある有名なタレントが、大使の「空いているときに座るのは問題ないんじゃないか」という主張を紹介し、「座らないといけない人がいたときに譲る精神が重要」と述べているが、私には正論のように思える。一方で、優先席に限らず譲って欲しい状況でもなかなか言い出せないのが実情ではある。理想論、と言われればそれで終わってしまうのだが、ほんの少しだけ他者を〝思いやる〟心の余裕は持ちたいもの

である。

「江戸しぐさ」に〝傘かしげ〟という、雨の日に道ですれ違う際、お互いに傘を外側に傾け、相手が濡れないようにする「しぐさ」が趣を醸す。また、道で人とすれ違うとき、外側の肩を引き寄せて身体を斜めにしてすれ違うことを〝肩引き〟という。この精神を持ち合わせていれば、ベビーカーに体当たりなどという危険な真似は出来ないはずだ。人の前を通るときに、手刀を振って通る〝横切りしぐさ〟は、横断歩道などで止まってくれたドライバーに対する感謝の印、お互いの気持ちがほぐれて交通事故の軽減につながるかもしれない。

七十有余年前、私が幼少の頃の父は、よほどのことがない限り私を席に座らせることをしなかったと記憶している。私も子供たちにそうしてきた。『全席が優先席』なのである。今回の優先席議論は、支援を必要とする人たちに対して寄り添う行動が自然にできる心構えを、もう一度養い学び直す機会を与えてくれているのではないだろうか。

楽しい時間　129

2023年6月30日

山本紀久雄

「明治天皇が鉄舟から得た判断基準」その十四

前号に続いて「日本武道学会会長」の大保木輝雄氏著書『武の素描』（日本武道館　2000年刊）、から「大悟」について整理・検討してみたい。

大保木氏は実験をもって解明しようとし、道場に四十名に集まってもらった。

その四十名を二人組編成にして、お互い道場の端に立ち相対する。一方の人はその位置に止まり、相手の人にゆっくり近づいてもらう。距離が接近し、近づいてくる人の気持ちに何がしかの変化が生じたら、その時点で止まってもらうという実験である。

結果は四十名のうち大多数が、人がお互いに礼をする距離である「九歩の間合い」で止まったのである。

次に、さらにその間合いから近づいてもらい、また気持に変化が生じたら止まってもらうと、それは、一歩踏み込み、手を伸ばすと相手の体に届く距離であった。いわゆる空手やボクシングなどの攻撃をしかけるときの間合いである。

またさらに相手に近づいてもらい、変化が生じたら止まってもらうと、相手の身体に手が届く距離で止まるのである。

この間隔からさらに近づかれると、自分の身体はひとりでに下がろうとし、身体をその位置にとどめるためには強い努力が必要となってくることが実感されることになる。

実験結果は、三つの地点で気持ちの変化が起きていることが判明した。

第一の地点は相手以外に他の介在を許さぬ、二人だけの意味ある特別な時空間の始まりを告げる場所であり、自分の意識が切り替わる距離である。

第二の地点は、第一の場より、さらにプレッシャーを感じ始めさまざまな情動が働きだし、体のもつ防衛本能と精神機能が混在し迷いを生ずる距離である。

第三の地点は、自分の意志よりも防衛的反射機能が優先する距離となる。

このように人間二人が向かい合って近づくと、心身の関係が切り替わる三つのポイントがあり、その地点を契機に身体機能が無意識的に、より深いところに向かって作動し始めるのである。

これを武道の稽古や試合での体験に当てはめると、以下のように考えられるという。

剣道では第二の地点、つまり、そこから一足出して打ち込むと相手に竹刀が届き、また、相手の打ち込みを避けることができる、いわゆる「一足一刀」の間合いが最も重要だと言われている。

この「一足一刀」の間より近くに入ると、次のようなことが起こる。特に大きな試合などでは、精神的に緊張してしまい、頭の中は真っ白になり、手や肩に力が入って地に足がつかず、自分が何をしているのかわからなくなったりする。

ただし、この第二の地点でも、調子のよい時や、初心者を前にすると、相手の動きがよく見え、心・足・手が一致して働き、内的統一性が乱されることなく存分に自分の力が発揮される。この体験から、どうやら対外的能動性は内的統一性に比例すると述べる。

このように、自分と相手が形成する空間の「遠近」は、自他の関係を決定づけ、自己の心身関係に動的な変化をもたらす。

その動的なある種の間隔に対し「気」という言葉をあてはめると説明しやすい。

すなわち、自—他の間をつなぐ実体を「気」とするならば、空間の遠近は気の密度に濃淡に生ずることになり、それが自己の心—身の間に流れる気に影響を与えることになる。

古人は、心—身の間に流れる気を「心気」と名付け、自—他の間に生ずる気と区別している。18世紀後半に著された『武功論事理惑問』（柏淵有儀著）には

《彼より来るべく、我も往くべき、これを間際と云。かれ位を取り、我よりも位を取る。是即ち権際なり、彼に気あり、我に気有て、機をなさんとす是所謂気際》とある。

彼—我の対峙空間では、これ以上前にでることができぬぎりぎりの関係となり、時間的契機のなかに動力学的な感覚を含む「機」が生じ、勝負となり、両者の関係は一応の完結をみる。この伝書に見られる「まあひ・つりあひ・きあひ」の説明は、お互いが一点に集中しながら接近し、離れていくまでの微妙な心身の変化をよく表している。

日本武術のテーマは、自分の置かれた情況をしっかり見据え、後に引かないで、いかにその場を切り抜けていくかであり、その結論としての究極の手段は「身を捨てる」ことだった。

剣術の古歌に「切り結ぶ刃の下こそ地獄なれ、身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」という「極意」の歌がある。

だが、この極意の意味は分かるが、その実行は難しい。相手を打ちにいくのではなく、逆に相手の刃の下に積極的に自分の身を置くことによって、結果的に難局が打開でき、身の安全が保たれることになる、というのである。

強烈なプレッシャーのなかで、「身を捨て」させ、その結果、見事な「技」を創出する。

技を介して「身の捨て具合」、つまり、心と体の状態を見るのが武芸だということができるのではないだろうか。このように大保木氏は解説される。

鉄舟は明治13年3月30日、徹底した禅修行によって「大悟」し、鉄舟は真理を次のように会得したのである。

「相手に上手下手があるのではなくて、自分自身が上手下手をつくっていることが分かったと」いい「自己アレバ敵アリ、自己ニナケレバ敵ナシ」という真理を会得した。

この真理を「無心」と呼び、「無刀」とも呼び、「無刀流」を興し、その後、道場・春風館を設立し門弟の育成に努め、撃剣道場というよりは、精神修養道場的色彩を帯び、天下の名士が出入りした。

鉄舟の唱えた無刀とは「心ノ外ニ刀ナキナリ、敵ト相対スル時、刀ニ依ラズシテ心ヲ以テ心ヲ打ツ」といい「其修行ハ刻苦工夫スレバ、例ヘバ水を飲ンデ冷暖自知スルガ如ク、他ノ手ヲ借ラズ自ラ発明スベシ」という徹底した自得主義であった。

明治21年（1888）、鉄舟五十二歳で亡くなるまでに春風館には四百余名が門人としてその名を連ねている。

このような検討から鉄舟の「大悟」をみるならば、自分に立ち向かってくる相手や事柄に対し、逃げないで対応し、いかに切り抜け、目的を達成するかという「心気（気力）」を修行・修練によって身につける状態に達したことではないか。

つまり、どのような状況下でも変わらない「平常心」を保つという境地を修行で獲得したのであって、これが鉄舟の「大悟」ではないかと、今は理解しているところである。

次号では明治天皇の判断基準構築の山場について述べたい。

『酔いの徒然』（一三六）

丸山酔宵子

『ビヤホール考』

梅雨も終わりに近く、いよいよ、ギラギラした真夏到来である。平日午前中は、仕事や雑用を終わらせ、昼食後は日比谷や銀座でロードショーを楽しみ、夕刻からお気に入りの馴染みのバーや居酒屋で一杯呑るのが定番である。このような陽気になるとビヤホールが恋しくなってくる。

特に最近は、コロナ禍でご無沙汰していた、新橋にある「ビア・ライゼ（BIER REISE）」に行くことが多い。ここには、「ビール注ぎの達人」松尾光平オーナーが取り仕切っているからである。

今から40年ほど前、1980年代の東京八重洲口は、現在の様にお洒落な佇まいではなく、未だ古い街並みが残っていた。そんな商店街の中に、崩れそうな建物の入口に「灘コロンビア」と書かれた昭和レトロな看板が掲げられた居酒屋があった。外見だけ見ればとてもビヤホールとは思えない。

平日の夕方は、開店と同時にすぐ満席となる。ここは、「ビール注ぎの名人」新井徳司の経営するビヤホールなのである。名人の注ぎ方は2回注ぎで、最初に勢い良く注いでから、上面のきめの粗い泡を特製ナイフでややほじくり気味にさっとカットし、その上に更にもう一度丁寧に注ぐ。泡はあくまでもきめ細かく、マッチ棒がピシーッと立つほどなのである。

この店で、新井名人の下で直向きに修行していた紅顔の美少年が「ビヤ・ライゼ」のオーナー松尾光平なのである。今日もきめ細かいビールを巧みな手さばきで注いでくれる。

では・・・。唇でクリーミーなきめ細かい泡を押しのけ、その下のビールを〝グイーッ〟と喉に流し込む。苦り仄かに、心地よい甘さが、優しく喉を通り過ぎる。「うーん、これは美味い・・・」

喉がなるビール注ぎの手のさばき

酔宵子

「灘コロンビア」と同じ頃、神田神保町の駿河台下に創業明治42年の老舗ビヤホール「ランチョン（LUNCHEON）」があった。ちょっと気取ったランチという意味の「ランチョン」では、〝昼からビール！〟の元祖で、小さなジョッキがワン・コイン100円。古びたウッディーなフローリングに古びたテーブルが置かれ、糊の効いた白衣に蝶ネクタイの小柄な白髪の先代が、カウンターに立ってビールを注ぐのである。ここのビールも2回注ぎで、最初にビールサーバーから注いだ粗い

泡を「竹ヘラ」でさっと滑らかに落とし、その上に丁寧に細かい泡を注ぐのである。

神保町という場所柄、様々な文人や文化人が出入りしていたが、行けば必ず会うのが、美味しそうにジョッキを傾け学生と話し込んでいる、吉田茂首相に勘当された英文学者の吉田健一であった。

ランチョンのビール泡切る竹のヘラ
酔宵子

日本の「ビヤホール」で忘れてならないのは、矢張り、銀座7丁目の「銀座ライオン」であろう。店内に入るとゴシック風の重厚な高い天井と壁にジョッキの触れ合う音、お客様の歓声が入り混じって響き渡っている。正面にビール造りの大型モザイク壁画があり、ステンドグラスの窓から、真夏の太陽がアンティークな煤けた壁に差し込んでくる。

昼下がりにも拘らず、初老の紳士達や外国人観光客が美味しそうにビールを楽しんでいる。ここではジョッキではなく、液体と泡の黄金分割が見事なグラスで、きめ細かい泡の冷え冷えを呑むことにしている。

「グイ、グイ、グィーイ・・・。俺はこのために今日まで生きてきたのか」との至福の瞬間である。銀座ライオンに通って半世紀。ここでの昼間のビールは罪の意識を全く感じさせない。

音響くモザイク壁画のビヤホール
酔宵子

東京が「銀座ライオン」とすると大阪は梅田新道交差点、同和火災地下の「アサヒビヤハウス（現アサヒスーパードライ）」である。戦後は進駐軍に接収されるほどの本格的ビヤホールで、夜ごと専属楽団と一緒に、「アイン！ツバイ！ドュライ！ズッファー！・・・・乾杯！」が広いホール一杯に繰り広げられている。

ここは、西宮工場直送の生ビールを、最高の状態で飲ませるために細心の注意を払っている。特に、ビールの泡の大敵である脂肪分除去のため、グラス洗浄へのこだわりは生半可ではない。通常、グラス洗浄のためのシンクは三槽あり、一槽目は洗剤で洗い、二槽目は濯ぎ、三槽目で仕上げが通常であるが、ここでは、三槽目は「おい！その水呑んでみろ・・・」と従業員に教育しているそうだ。

今宵また
アイン・ツバイ・ドュライの
ビヤホール
酔宵子

樹木礼賛（じゅもくらいさん）

高橋育郎

わたしは樹木がすきだ
天をめざして高く大きく伸びて行く
その姿に　わたしは畏敬の念を持ち多くを学ぶ

春　枝はうっすらと芽を吹いて
人に希望の喜びを与え
夏はたっぷりと葉を繁らせ
人はその下に憩う
秋には錦繡をまとい
人は感歎の声をあげる

やがて木枯らしにうちふるえ
その衣は千切れて　中天に舞う
そして身を引き締め

冬の寒さに耐える
散り敷く落ち葉は地中に沈み
春に備えて養分とする

めぐる季節に順応し
年輪を重ね　生きて行く　その智恵は偉大だ

地には深く根を張って
磐石の基礎を固める　その力は偉大だ

自然の営みにさからわず　あるがままに身をさらし
輪廻転生疑わず　この大地に身をゆだね
何の驕りもへつらいもなく　平常心に生きて行く

なんとも悠然たるものではないか
わたしは樹木を仰ぎみて　礼賛する

絹の話（153）

「アトリエトレビ」今泉雅勝

貝紫を染める　そのⅡ

幼少の頃のアカニシ貝の思い出

筆者は愛知県豊川市（旧宝飯郡）御津町御馬の生まれで19歳まで穏やかな三河湾と生活を共にして来ました。特にアサリの美味しい春から夏にかけての潮干狩りは生活の一部で、浜のどの場所のアサリが美味しいか、子供でも知っていて、家族が十分食べるだけ急いで採り、満ち潮までの時間に大きな石の下にいるカニや小魚採りに夢中になったものです。小砂利と砂が混じった所では時々アカニシ貝やウンネーという表面がツルツルの巻貝が採れ、砂の中から車海老などが飛び出してくればボーナス気分でした。アカニシ貝と春の分葱（わけぎ）の赤味噌ヌタは大好物でした。アカニシ貝が採れない時は堤防の石に付いている親指大の小さなイボニシ貝を採って、茹でて楊枝で食べますが、大量に食べると口の辺りが痺（しび）れます。これが貝紫を染めるパープル腺です。アカニシ貝はこのパープル腺液を使ってアサリなどを捕食するので、アサリ養殖業者にとっては大敵で、漁業権外に指定されています。

大学生なったある日「貝紫染め」のことを知り、帰郷して時自分のTシャツを染めてみた所、見事な紫を得る事が出来ましたが、自分の指先まで染まり、爪は半月ほど紫色のマニキアの様になり、電車のつり革などでは恥ずかしい様な誇らしい様な気分になったものでした。

ところが地元では貝紫の話を知る人はいませんでした。ただ後日、知多半島の方面で貝紫染めグループがあると聞き及んでいます。

紫色の来た道

今日では紫色を特別扱いする人はいませんが、科学染料が発達するまで、洋の東西を問わず紫色は希少で特別高価な色であった様です。人類が紫を染め始めたのは紀元前１６００年頃フニキア（現在の地中海に面したレバノン地域）人が貝で紫染めを始め、高価な交易品として流通させていた様です。

この頃、近くのヒッタイトは鉄を発明し、その力で大帝国を築いて行きます。やや後年中国の漢族の作った絹を持った中国北方遊牧民が絹を「鉄」、「戦車」、「紫染布」に交換して帰ります。鉄器を得た漢族は強大になり絹の

生産は増して行きます。

それ以来中国の王は功労のあった者に紫布を与えていましたが、あまりの高価に耐え切れず、中国独自で紫草の根「紫根」から紫染めをする様になり、貝紫布との交換はされなくなりました。しかし紫根染めも大変な労力が必要な為、紫を着用するのは王のみで、家臣、庶民の使用を禁じましたので、天子の居城が「紫禁城」呼ばれる様になり、清朝滅亡（明治時代）まで続きます。

日本でも縄文時代から貝紫が染められていると言はれていますが、実際の遺物は弥生時代の吉野ヶ里遺跡から貝紫染め絹布（経糸（たていと）が日本茜染、緯糸（よこいと）が貝紫染）と当麻（たいま）布の出土が最初です。その後の発掘はありませんので貝紫染は早い時期に廃れてしまったのでしょうか。

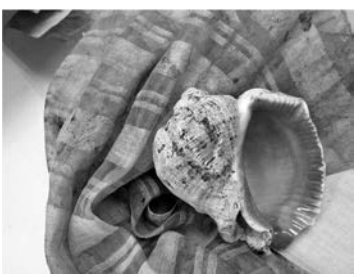
日本で紫色が正式に官位を表す色と指定されるのは大化の改新で、冠位十二階の最高位の色を中国に習って大徳＝濃紫（薄紫は小徳）と定め、紫根で染められた様です。また紫色が最も愛でられた時代は清少納言や紫式部が活躍した平安時代（藤原時代）でした。

貝紫を王達が好んだわけ

貝紫の染色堅牢度の高さは現在の科学染料に比べても他に類を見ませんので、古代からの権力者は不老不死で永遠ありたいという願いに叶った物でした。

紀元前１４００年頃の南米の遺跡や紀元前１１００年前のイスラエルで発見された羊毛の紫が貝紫であった事を考えると染色堅牢度の強靭さが解ります。

クレオパトラがローマに向う時船の帆を貝紫に染めさせた話は有名ですが、その訳は地中海の航海中に太陽の光に晒されればどんな染料でも色あせますが、貝紫はより鮮明に紫が映えて来るからです。この美しさの効果は的中してエジプトはローマの支配を逃れたばかりか、進軍して来たローマのアントニュウスを養夫の様にしてしまいました。



「江上浩二の独り言」68

江　上　浩　二

任されたカメラマン

令和五年六月中旬、何気なく目線を落としていたＴＶ番組なにやら主役は50ミリのレンズだと聞こえてきた。

50ミリのレンズは周辺の歪みが少ない　広角レンズは嫌い　ロケも嫌い・映らないやじ馬が場を壊す　ともさらに聞こえてきた。映画か、何か撮影の話だなと思って、変えた自分の視線はそのＴＶ画面にこれから暫くの間、くぎ付けになって行く。

補正光学、映像の歪み補正を行うデジタルソフト技術などとんでもない、足の短い三脚が似合う低い目線の撮影用カメラ、普通の監督目線は上から目線で、下を見下ろす角度となり不自然であるという厳しい主張をお持ちのようだ。

画面は変って、

小津監督の白黒の時代もの、登場した男優さんは若い笠智衆。ある映画のシーン、固定された画郭で動くものが三体、立ち上る香取線香の煙、男優の喉ぼとけ（喋らずとも空唾を飲んで、動く）、背景をゆっくり左から右へゆく船。

たったそれだけという感じではあるが、ロケも嫌い、それも普通は取り囲んでくれるファンを大事にと思うが、そうではない親分と想っている監督の意図する映像をとらえた50㎜のレンズをじっと操っているカメラマンがいることを忘れてはいけない。

ゆったりとした世界だが時の歩みは感じる、決して日本人が静寂で物静かだという事を表現したいとかではないであろう。文明開化で明治時代になると諸外国、特にイギリス、仏、独、米から日本国が西洋文化を急いで学ぶために人を招致したり、人伝に日本の魅力を聴いて訪れた人達の一人に、イザベラバード女氏がいて、残した旅行記をみると、日本の地方の山村を巡り歩いて旅をして残した日記にはまだまだ江戸の臭いが残る山村の夜の民衆の生活が描かれているが、

意外と日本人のざわついた表現が各所に記されている。

この時代では昨今のアナログ、デジタルという堅苦しい説明などが不要な白黒の銀塩フィルムをとことん追求したもので、映像が生のまま（現代のデジタル技術であるような歪処理も出来ない）。ただフィルムの前のレンズを気に入るように使いこなすことで、監督の出来がきまるようだ。

白黒映画の小津安二郎監督のカメラ助手を十五年、カメラマンとして十五年以上、それ以降は任されたカメラマンとして監督が亡くなるまで尽くしたそうで、それが出来て涙を流している。

任されたカメラマンとは

任すよと自信をもって託す側の監督との間に古めかしい表現だが阿吽の関係がある。一般論として上司、リーダ、経営上級者とは互いに信頼と自信があるはずで、後になってこんなはずではなかったと変な涙を流されても困惑するだけだ。

任されたカメラマンはすすり泣きするような、こみ上げるてくる涙を流すまいと堪えていた。

今時、嗚咽をこらえる程までに親分と子分、上司と部下、先生と教え子、マイスターと弟子といった関係が築かれるのか、任されたカメラマンの持つ自信は決して、独立して親分から離れず（自分が新監督としてはならない）あくまで影武者カメラマンに徹していたことであった。

初狩便り（21）

花野みぷり

夏の恵み

暑い。人間には、耐え難い暑さも植物にとっては恵みである。畑の西瓜は太陽の光をたっぷり浴びて、丸々と太ってきた。これを笹子川の冷たい水を引き込んだ水路で冷やし、仲間たちと畦道でがぶり！

畑ではトウモロコシが良い感じで育っている。トウモロコシ好きの久美ちゃんが、手塩にかけ、楽しみにしている。ところが一昨年は「来週食べようね」と言っていた翌日に、猿かカラスかに食われてしまった。昨年は猿の出ない畑に植え付け、頑丈な杭を立て、ガッシリとネットを張った。空と地上からの害獣除けは完璧だったが……地下から来たアナグマに食われてしまった。ネットの下を潜り、一晩で完食されてしまったのだ。初狩では、アナグマのことを「マミ」と呼び、防ぎようがないと言う。今年はこれらの教訓から、マミの出ない畑にトウモロコシを植えた。すっかり自信をなくしている私たちは、食べるまではわからないと顔を見かわす。

立秋の頃になると、稲は穂を出し、花を咲かせる。畑では、夏野菜、西瓜、メロン、枝豆など、おいしいものがいっぱい。暑い暑いと文句を言わずに、夏の恵みを楽しもうと思う。

（写真：菅野昌英・内山和夫）

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言
https://hondachiro.exblog.jp/

2023年7月12日

種を飛ばす???

昨年　患者さんからいただいた　シソ　を本田カイロのアプローチに植えました

元気に育ってくれましたが年明けに枯れてしまいました

それから半年ある患者さんから

「先生　入口の植物　シソですか?」という質問を受けました

「前はシソ植えてたんですが　枯れてしまいまして・・・雑草かもしれません」

その患者さん　「あの植物　シソだと思いますよ」

その患者さんの話によればシソは　種を飛ばす　というらしく繁殖力が強いらしいんです

確かに周りのプランターを見てみると何箇所かシソが驚

通路の反対側のプランターにも育っていました

恐ろしい繁殖力

もちろん枯れて無くなったシソのプランターは何もなかったかのようにシソが元通りに・・・

ただ　かなり虫に食べられていました

そのおかげで　他の植物が守れました

シソありがとう

そして

教えてくださった患者さん　ありがとうございました

今日も笑いながら行きましょう

2023年7月14日

健康において何よりも大切な事

昨日から暑さが少し落ち着きました
とはいえ温度と湿度は高いんですが身体が夏使用に変わってきている為1か月前では暑すぎる！
と思っていた温度でも涼しく感じます
身体って凄いですよね
本田カイロでは身体の良い状態を維持する為３Ｓ＋ゆたぽん＋ヨーグルト＋八分　というのをお勧めしています
その中でも睡眠が1番大切というのをかなり前から書かせていただいています
睡眠といっても睡眠時間ではなく入眠時間と起床時間が大切になってきます
22時～23時までには入眠するというのが本田カイロの考えです
ただ日々の忙しさや崩れたルーティンから中々抜け出せず出来ない方も多いと思います
そこで週に2～3回は　～22時～23時までに入眠するというのはどうでしょうか？
休日を上手く使い　週の半ばで1回早く寝るというのをして身体を心を回復　治療　アルツハイマー予防　老化劣化予防をしてみて下さい
それだけでも1週間を過ごす身体や心がかなり違うと思います
もちろん22時前に入眠しても大丈夫です
試しにやってみて下さい
今日も笑いながら行きましょう

康鍼治療院（www.yasuhari.com）　玄　翁

「長夏の季節」

長夏は　夏の最盛から
秋の前の季節なり
太陽・陽気に照らされて
大地の土気は蒸し出され
暑気と湿気が　充満し
自然の草木は繁茂する

人にとってはこの季節
暑気が陽気をめぐらせて
陽気は　水分・血流を
動かす原動力となる
湿気は　本来　潤う気
胃腸の働き　促して
全身栄養　満たされる

暑さと湿気を避けるべく
冷房　水浴び　冷飲食
汗を避けて　動かねば
身体の内外冷えに負け
気血や水分　停滞し
胃腸は弱りて　逆効果
食欲低下し　怠くなり
皮膚病　浮腫みが現れる

長夏の時期の　養生は
適度に動くが　肝心じゃ
早起き　体操・散歩して
日中冷房　冷えたなら
夕方歩いて汗かいて
余分な湿熱　外に出す
食では豆類・トウモロコシ
瓜類・トマトや香菜類
季節の食材　楽しめば
余分な湿熱　動かして
胃腸も働き　元気となる

長夏の季節の暑気・湿気
適度に感じりゃ　順応し
実りの秋へと　準備する

「胃の気が生命力」

人間生命　食べるが基本
胃の働きが　生命線

胃の働きが　良いならば
六腑が働き　陰と陽
消化・排泄　順調で
陽気や栄養　満たされる
陽気を体表　めぐらせて
皮毛や　肌肉充実し
汗の調節　うまくいき
免疫力が　維持される

胃の働きが　悪ければ
消化・排泄　停滞し
陽気や栄養　満たされず
気血のめぐりが悪くなる
体表　皮毛が弱くなり
体温調節　不調となり
汗はダラダラかき過ぎて
免疫力も低下する

胃の働きは　胃の気と言いて
生命力を左右する
胃の気があれば　暑寒陰陽
変化に強い　体となる
胃の気が弱れば　力が落ち
夏バテ　風邪ひき　弱ってく

胃の気を上げるにゃ三つあり
一つは胃腸を冷やさぬこと
夏でもできれば　白湯飲んで
胃を冷やさぬことが肝要じゃ
二つは　咀嚼で唾液出し
味を感じりゃ　胃が働く
三つは　もも・スネ　胃の経絡
動かし、伸ばせば胃が動く

胃の気があれば長生き元気
夏でも冬でも　健康じゃ

畦上蛙鳴

雨止み天青く孟夏行き
風和らいで水白く美田横たわる
試みに畦路に杖つけば嘉苗浄く
只有り四方螻蟈の声

畦上蛙鳴
雨止天青孟夏行　風和水白美田横
試杖畦路嘉苗浄　只有四方螻蟈聲

殿山木風

（語釈）○孟夏…初夏。夏を三つに分ける。○嘉…美しい。目出度い。○蝼蟈…蛙。

（通釈）雨が上がり、空は青く季節も初夏が移り行く。風は和らぎ水は輝き美しい田んぼが横たわっている。試みに畦道を歩くと苗が整然と植えられ清らかだ。そしてただ四方に蛙の鳴き声が盛んに聞こえるばかりだ。

※漢詩作りを試みたのは四七歳の時である。紹介された先生は丁度四七歳から始められたことを後に知り、意を強くした思いを覚えている。先生は然し、会社経営した市井の人であったが誰よりも学者風であった。「詩語辞典」も上梓されている。無駄なことはあまり話さず。詩の解説は淡々として、今日は眠らないぞと構えてもついつい快い眠りに誘われるのだった。拙詩を恐る恐る封筒で提出すると間違った漢語や表現に朱筆を入れられ、同じ韻字を使って絶句を作り添付された。詩の程度は下手は下手なりに作れと仰っておられる気がした。

漢詩の指導者は習作を学ぶべきと主張される。私は自分が感動した物事にやっと意欲が出て詩作に挑戦したものである。題を与えられて作詩するという事は絵や内容を想定しなければならないから案外難しいモノである。先ずある程度作り始めたら、実力を錬る為に改めて習作に挑んだ方が良いと思っている。吾が岳精会の勉強会で右のお題が出ていた。すぐさま思い浮かんだのは少年の頃の田んぼでの風景であった。想い出は牧歌的で所を変えて豊富である。畦を歩いていると蛇が鎌首をもたげているのに出会った。その向こうに蛙がいた。或いは田植えが終わった校舎の横の田んぼで一人立ち小便をしていると、カラス蛇がこちらに向かって鎌首を挙げて泳いできた。途中で私は逃げたが神秘的な風景だった。

畦道にすくむ蛙とカラス蛇

編集室だより【二〇二三年六月】

今泉　由利

○穏やかに家に籠っていても、時速十万キロで移動している地球。せめて地球の上の、一番遠い所へ行ってみよう、と思いたった日があった。日本、愛知県から、地球の芯を通って向こう側の地球の表面に出ると、そこはアルゼンチンのブエノスアイレスに近いと知る。その当時の、自分の持物を全部、船に積んで、その船に乗って四十五日。本当に、ブエノスアイレス港に辿り着いてしまった。

何語が話されているのだろうか。どんな生活のところなのだろうか！。そういうことを考えるということすら気付かないで…。

着いてしまったところで、その時、しなければならなかったことを、一つ一つこなしている時、何を基準にしても、アルゼンチン一番と思える。セリーナさんに出逢いました。その瞬間、二人で安心してしまったのでした。お互、言葉もわからず、何もかもわからなかったのに、合った途端二人で安心してしまったということ。セリーナさんは、私が、アルゼンチンを大好きになるよう、導いて下さいました。私の滅茶苦茶を、正しい方向に導いて下さいました。そして、私の基本とセリーナさんの基本と一致したのでした。

○今から一八〇年ほど前のこと。医師であった私の祖父が、長男の「内科、小児科」と、次男の「歯科」をふくめた総合病院を作ろうと試み、従って一つ敷地内に、今泉雅勝氏の育った家、今泉由利の育った家、がありそれぞれの医院があり、交流がありつつ育ちましたが、相談したわけでもなく私は、日本から一番遠い国に出掛けてしまい、雅勝氏は、南太平洋のニュウヘブリデス諸島の石器時代さながら、スモールナンバース族と住んでいたり、絹の研究に長け、興味深々のお話を沢山持っていて、感心してしまいます。学術的なことから、冒険的なことまで。良く、まあ、こんなに…。彼のお話を聞かなくては、もったいなさすぎますので、三河

アララギ主催の、『絹のお話会』を計画します。ご意見、ご希望をお寄せいただければ幸いです。是非、ご出席下さい。詳細は三河アララギ九月号に掲載いたします。

○今泉雅勝の「アトリエ・トレビ」の絹の館の絹製品にうずもれてのお話し会になると思います。心ゆくまで絹にまつわる、日本での歴史、外国での絹の歴史、絹の日本事情、絹の種類、絹に関する全事情、天皇家とのかかわり……どんどん話がそれて、また一段とおもしろい世界に入り込んでしまったり…。

講義のあとは、近くの日本料理レストランで参加の方々のお話もうかがい。もっと聞きたいお話がでてきたりしながら食事をし…そんな、皆がもうひとつの主役になれる会を望んでいます。

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所　〒一五〇-〇〇一三
東京都渋谷区恵比寿三-四五-三
フォーレストヒルズ三〇二
ケイタイ　090-8434-8646
TEL　03-6765-5838
◇URL　http://imaizumiyuri.jp/
E-mail　imayurizm@gmail.com

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇どなたも参加、投稿いただけます。
三河アララギ編集室 今泉由利 までご相談ください。

◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、メール、お届け下さい。

◇会費制は廃止。

◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アララギ」誕生。

◇令和四年現在まで一号の欠刊なく、続いてきました、続いてゆきます。

◇編集・発行　今泉由利